



社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会



ホーム
ページ
QRコード



ツイッター
QRコード

2022/8/1 No.90

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

御礼の挨拶 過ぎ越し方を振り返り



井本 義孝

主の聖名を賛美いたします。私が導かれるままにドイツの福祉の

町ベートルに参りましたのは一九六九年四月の事でした。出発前は学園闘争の最中であり一月には東大学長室が占拠され騒然たる社会情勢でした。三月の卒業と同時に、シベリアルートでドイツに着きベートルで牧会者及び、施設長たちの二か月にわたる研修会に参加いたしました。時を同じく四月十五日養護老人ホーム楽生園が開設されました。三十数年後この施設に施設長として着任することとなり、不思議な神の導きを思います。この年七月二十日はアポロ十一号が月面に到着、アームストロング船長の姿がテレビに映りました。このころであったと思いますが、ムッタハ

ウスと呼ばれていた、当時の福祉施設職員養成所にエールフリーデ、ベックシュティゲルさんを訪ねました。玄関に大きな百号以上の「善きサマリア人の絵」がかかっていました。この時ドーラ先生が丁度前記のシスターを訪問されており、玄関ホールで私を目撃したことを三十有年後先生から知らされたのでした。後年小川文生理事がご退任となりそ

の後任として当時千葉県社会福祉事業団在職中であつた私にお話があり、のぞみ会とのご縁となり、以来六十五歳で着任し二十一年有余の永きに亘り皆様方の福祉の情熱に励まされ、慰められて今日に至りました。この間不徳の致すところ過ち多く加えて生来の直情径行は多大のご迷惑を周りにおかけしたと存じ心からお詫び申し上げお許しを乞う次第です。人生とは実に神の摂理そのもののように思えます。いつも念頭にドイツの福祉の町ベートルのありさまがあり私を駆り立ててきました。思えば社会福祉程素晴らしい職業はありません。不完全な人間が相手のニーズに応えてサービスをする、そしてそのことが仕事として評価される。本人の父・母に出来ぬことを業務として尽くす尊さ、そしてその使命の重大さ障害者もなく健常者もない。人皆不完全な人間同士の営みであることを考えるとき、弛まざる研究心と向上心が不断に求められるのは当然のように思います。

のぞみ会には創設以来六十年キリストの教えに培われた素晴らしい伝統があります。始業前の賛美とお祈りの時は福祉の業の根本は隣人に仕えることにあることを脈々と伝えていきます。すべて先達の偉大なる遺産であることを思い嗣業として受け継いでまいりましたことを心より感謝いたします。

予測の極めて困難な今日ではありますが福

社の役割は毎日に高まることでありましょう。願わくはここに生活を共にする方々の良きパートナーとなり労苦を共有し、この共同体が地域の人々からも、これからも益々信頼され愛されてこの富津市が「福祉の町」に「日本のベーター」になりますように祈ります。本当にこの二十一年間、主の恵み溢れる感謝の時でありました。愛する望みの門の皆さん、永年のご厚誼を感謝し万感こもごも胸にせまり意を盡くし得ませんが、いささか感慨を申し述べ御礼のご挨拶といたします。

(前 常務理事)

恩寵六〇年

主共にいまして 4



ユーラシア大陸ひとり旅

前 常務理事 井本 義孝

一九二〇年七月の母の急逝により止むなく帰国を決定した。しかしキリストの伝道者としてここで挫折することは許される事とは思えず煩悶した。結果キリストの僕として歩むには少しでも異教社会を知らねばならないと思いつめた。そして冒険ではあったが、ヨーロッパを陸路縦断し、ギリシャ、イスラエル經由トルコからインドまでユーラシア大陸を

見聞し陸路帰国することとした。今にして思えばガイドブックがあるわけではなく、只、東へ進めば必ず日本に帰国出来ると単純に考えた。出発は九月九日の重陽の節句を吉日として選んだ。既に母の死から二ヶ月が経ち、この間お世話になった方々へのご挨拶やいろいろとあったが、足を重くしたのは去り難いドイツの友人たちの暖かい人情であった。ついにカスタニエンの樹々が黄色の葉をつけはじめた九月九日、ハンブルクのダムドア駅から出発した。駅にはボーク師ご夫妻が見送って下さった。

列車はエルベ河を渡り一路南下した。途中ゾーリンゲンに近いボーフムでは友の歓待を受け、特にヘルガ、ユッペンラッツ夫妻には宿泊させて頂き、夜行列車の席を予約していただいたり、又、弁当まで持たせて下さった。列車は、ミュンヘン、フイレンツェを経てローマではおきまりの観光コースを見物、特に聖ペテロ寺院、バチカン博物館ではミケランジェロ、ダビンチ、ラファエロに圧倒された。昼食のあとコロセウム、カタコンベなど、一人旅の気楽さを、足にまかせて歩く。一人ついに「ローマに立つ」の感慨あり。夕方ポンペイに行く。夜の九時頃着く。あくる日遺跡見物に行く。AD七十九年ベスピオ火山の噴火により多数の市民もろとも噴火の犠牲になったのはあまりにも有名である。

ポンペイを発して途中タラントにて乗換えの時ホームを間違え列車に乗り遅れる。今晚アテネに行く予定を変更し、ここイタリア南部の町タラントでヨーロッパ最後の一夜を過ごすとは、休養せよとの神の啓示かと感謝しつつ床につく。

思想と文化に思いをめぐらす。両者は表裏一体ではないか。その根本は信義にある。ドイツとイタリア簡単に比較することは出来ないが、一人旅としての感じでは人としての誠意、正直、質素という徳性がドイツ文化の土壌にあり、繁栄をもたらしているように思えた。長靴に似た地図のかかとのブリディシに着いたのはちょうど十二時。そして日曜日であった。予定にはなかったがこれぞ主の贈りもの、久し振りにゆっくりとし、イタリアの生の姿に触れたのは幸いであった。ホテル、レストラン、小売店で買物をして不愉快なのは大半釣銭を出さないことでチップの先取りか、なんとも後味のわるい印象である。救いは子供たちの天真爛漫であった。歩行者はツバを吐く。ポイと路上に煙草でも何でも捨てる。信号は殆ど無視している様子。

それでも何やら悠揚せまらざるものを感じる。公園での団らんの様子は日本ではみられないものである。コミュニティとしての人と人とのつき合いの場がいたるところにあるといった感じである。



ヘットカンブ先生
(ビデオレターより)

「ヘットカンブ先生はお元気でいらっしゃいますか？」と、二、三ヶ月に一度地方から電話をして来る退寮生のE子さんがいます。

指導員 高杉 至子

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家 ヘットカンブ先生



ブリディシ港にてアテネ行の切符を二十八ドルにて買う。ドルをドラクマ(ギリシャ通貨)に代える。一ドル三十ドラクマであった。出船手続が二十一時に始まる。何故か我れ先にと大混乱、船室は二人室が自分のみ、シャワー後、ビールでヨーロッパに乾盃し、これからアジアに往く。ドイツよ!アウフヴィダゼーエン!祈らずにはおれない。上甲板で一人祈る。折しも雲間にかかる三日月に山中鹿之介の心境。われに七難八苦を与え給え!全ての不愉快さ雲数霧消。ハレルヤ!

昨年のクリスマス前、またいつものように電話をかけて来ました。先生がお元気でいらっしゃることに加えて、十月に『東京いのちの電話五十周年記念式典』にビデオレターで出席されたことを伝えると、四十年前に先生と一緒に生活されたときの事、心の思いをいつもよりたくさん話し始めました。

ある時、先生は神さまの手の中で寝ている赤ちゃんの絵を見せて、「E子さん、私たちは人間は神さまの手の中ですやすやと眠っている赤ちゃんのようなものですよ。」と優しくおっしゃったそうです。E子さんはそれを聞き、「私も神さまの手の中ですやすやと眠っているんだ。それでいいんだと思えてほっとした気持ちになり、それから自分を信じることに、先生を信じるのが嬉しくなったんですよ」と明るく言われました。そしてE子さんは、何十年も経った今でもその時のお姿が思い出されて、どうしていらっしゃるのかなと思うと心が和み、神さまとヘットカンブ先生のつながりで、自分もがんばろうと思えるのだそうです。『あなたの幸せが私の幸せですよ』と言って下さったことは忘れられず、今の私の支えなんです」と。

E子さんのことの中で「私が先生にお会いするまでの絶望の二十年は、お会いしてから希望の四十年に変わりました」と話したことが心に響きました。今でも寮生の方々に

「望みの門をくぐったら、新しい自分として歩んでいけるんですよ」と語り継がれていることを、これからも伝え続けていくことができるように願っています。

東京望みの門が六十五年続き、今もここに有る事の真の意味を心に留めて大切にしていきたいと思えます。最後にヘットカンブ先生のビデオレターのお言葉をお伝えします。「なぐさめの神さまが皆さまと共におられますように!」

去る五月二十一日、富津公民館において、望みの門六十周年記念式典が行われました。その中で、記念歌の発表があり、望みの門学園が合唱を行いました。指揮は木下勝世副理事長がしてくださり、伴奏は私がさせていたできました。今回は、三曲歌われました。一曲目の「望みの門をくぐったら」は、日本キリスト教団西千葉教会の坂本説子様が作詞して下さいました。幼稚園の先生を長きに渡ってされていた方で、子どもたちと一緒に歌うようなイメージで、作詞されたとお聞きしています。

望みの門六〇周年記念歌の発表

婦人保護施設 望みの門学園

作業指導員 俊野 まり子

二曲目の「主の愛が」は望みの門に四十年近くに渡って勤められている学園職員の遠藤利子さんが作詞をされています。毎日の生活の中でそれぞれが、愛のある言葉を交わしあうことの大切さを教えて下さいました。

三曲目の「この幸せをありがとう」は、藤波真智子さんが作詞して下さいました。とても素直な言葉で書かれた詞です。作曲はいつも木下勝世副理事長がして下さいました。望みの門学園では、毎朝十五分〜二〇分ほど、記念歌を四曲歌っています。今回は発表されていない、「ジャーマンウインド」という曲も「好きだ」という利用者の方が多く、とても心に響く曲です。月に一度、木下副理事長が賛美歌指導に来てくださっています。式典当日は、皆緊張しているように見えました。私もとても緊張しましたが、幕が上がった瞬間、祈るような気持ちと神さまに届けるような気持ちでピアノを弾きました。皆の声



も、いつもの朝と同じように響いて聴こえてきました。お客様からは、好評を頂くことが出来、「望みの門をくぐったら」に感銘を受けましたと言って下さったお客様もいらっしゃいました。望みの門六十周年という節目のときに、伴奏させていただいた恵みに感謝いたします。

養護老人ホーム 望みの門楽生園

現在・過去・未来

支援員 山崎 恵美

令和四年七月で入職し一年、養護老人ホーム望みの門楽生園で支援員の勤務は十か月経ち、以前は特別養護老人ホーム望みの門紫苑荘で介護職員としてお世話になりました。そんな私が介護職になる経緯は（父方）祖母との経験からです。私は、小さい頃から、おばあちゃん子で、いつも優しく、とても背も低く、顔も可愛く、大好きでした。

その祖母が、私が小学校の頃、胃の手術後、寝たきりになり、家族交代で病院に付き添い泊まっていた。

まだ手術前、元気だった頃は、お料理の作り方、地域の事、戦争の体験、苦勞した事、昔の道具の作り方など、色々と話して教えて今では財産になっています。長い入院が終わ

り、自宅へ退院できても、母が仕事をしながら私達兄弟と祖母の食事の支度や、介助、オムツ交換などの介護をしており、母が仕事中は、私も食事・体位交換・歩行練習など手伝っていました。そんな祖母が施設に入ると、最初は頻繁に面会に行っていました。ところが、社会人となり、日々の仕事に追われ次第に足が遠のいてしまい、数か月に一度位と面会の回数が少なくなりました。そんな祖母ですが、亡くなる時には、私の夢に出てきてくれました。こんな事してあげれば良かった...など、先日の夢でお別れの挨拶に来てくれたのかなと思うと後悔ばかりしかありませんでした。それは祖母だけではなく、過去に飼っていた犬や猫、フェレットなど動物達にも同じ感情が残っています。そのような後悔から、もっと自分出来る事、寄り添い、支援、介護ができるよう、介護福祉士の受験をし、合格する事ができました。合格しても、まだまだ自分自身、理解できていない部分も沢山あるため、学んでいこうと思っています。

今後は、子供達の成長を見守りながら、今飼っている犬が老犬の為、ペット介護士の資格を取得するために頑張っています。

この一年、多くの人に出会い学びました。これからも祖母からの教えを基に沢山の事を

吸収して自分自身が変わって人として謙虚に成長して行けるように努力していきたいと思っています。

夏の風物詩



特別養護老人ホーム 望みの門 紫苑荘

事務員 斉藤 愛実

例年ですと七月初旬はまだまだ雨が降りしきる時期ですが、今年はすでに梅雨が明けて早くも夏の暑さがやってきました。今年の梅雨は過去最も短い梅雨になったとのこと。梅雨明けそうそう酷暑が続く、盛夏の時期にはどれほどの暑さとなってしまふのかと心配です。さて夏といえば暑さも印象深いですが、何より楽しいイベントが盛りだくさんの季節ですね。海水浴、キャンプ、花火大会といろいろイメージされると思いますが、なんといっても一番に思い浮かぶのはお祭りではないでしょうか。そんな夏の風物詩を利用者様に楽しんでいたかどうかと、紫苑荘では納涼会の準備に取り掛かり始めました。

納涼会では焼きそば、たこ焼きといったお店でするような普段と違うお食事を味わっていただき、利用者様、職員ともに盆踊りを踊ってお祭りの雰囲気を感じていただけるように計画を考えております。昨年はレクリエーショ

ンとしてヨーヨー釣りを行いましたが、今年は金魚すくいや射的も追加で行ってはどうか、など楽しむためのアイデアは尽きません。

感染症対策



のため外出の制限がかかっていることもあり、利用者様は施設内で過ごされる時間が多くなっています。自ずと季節の移ろいを肌で感じる機会が少なくなっていました。そういった状況の中、行事を通して季節を感じ楽しんでいただきたいという想いで職員一同、趣向を凝らして行事に取り組んでおります。

そんな納涼会ですが、新型コロナウイルス流行前のご家族も招待し一緒に楽しまれていたようです。紫苑荘へ異動して一年。感染防止のため制限、縮小での納涼会しか経験していない身としてはなんだかさみしく感じます。新型コロナウイルスが一日も早く収束し、また利用者様とご家族と共に楽しんでいただけるような日が来ることを心より願っております。

より良い介護の為に

介護員 和田 直美

五十歳で富士見の里に勤務してから十月で十年を迎えます。なぜ五十にもなって介護職に就いたか、それは母を自宅介護した十三年の間、色々な方に助けて頂き母を看取ることが出来た事がきっかけです。

その頃のショートステイは預かってあげるんだからという感じが強く、微熱でもあれば預かってはもらえませんでした。そんな状況に加え、子供が喘息で入院し付添いしなくてはならず途方に暮れていた時に「望みの門」を知りました。面接して頂き状況を説明すると「大丈夫ですよ、いつでも利用して下さい」と言っていたいただいた時には涙が出ました。その時の面接をして下さった方と、今は富士見の里で共に働かせていただいております。

母を看取った後、今度は私が恩返しをする番だと思いながら今まで介護に従事して参りました。コロナで利用者様には外出もできず、余興を行うボランティアの方にも来てもらえない状況の中、少しでも楽しんでいただきたいと誕生会・お節句・駄菓子屋など色々な行事を行っております。利用者様のサービス向上と職員の資質向上は法人の理念でもありま

す。私の所属しております従来型では、法人理念に倣い自らの技術向上を意識して学ぶ、「報・連・相」がきちんとできるチーム造り、を部門目標に掲げて努めてまいります。

さて、富士見の里にこの六月よりミャンマーから三名の技能実習生が参りました。習慣の違いや言葉の壁もあり、親元を離れた不安や寂しさもあると思いますが、毎日一生懸命に利用者様の名前を覚えコミュニケーションを図り笑顔で頑張っています。これが逆に私がミャンマーに行って同じ様にできるかと言ったら、それは出来ないと思います。ですから尚のこと、彼女達の頑張りに少しでも力添えできる様に、そして、それが利用者様の日常に溶け込み穏やかな気持ちで過ごしていただけるようになれたらと思います。その為の、チーム造りは、一朝一夕には中々出来る事ではありませんが、職員同士のコミュニケーションを図り実現に向け頑張っております。

老人デイサービス事業 望みの門デイサービスセンター

あつという間の三ヶ月

副施設長 岡 和子

約九年間お世話になった「望みの門訪問看護ステーション」が休止となり、四月一日付

で「望みの門デイサービスセンター」へ配属となりました。早いもので三ヶ月が経過しましたが、配属当初は曜日ごとに利用者様が変わることで利用者様の名前と顔が一致せず、苦労した事を思い出します。早く覚えられるよう、誰が何番のテーブルに座ったかを毎回小さなホワイトボードに書く事を繰り返していました。いつの間にかボードも必要なくなりました。利用者様のお名前を呼び気軽に会話ができたようになった事は何よりうれしい事柄でした。また、以前訪問看護でお世話になった数名の利用者様とデイサービスで再会ができ、こちらも嬉しい出来事でした。

デイサービスでの勤務内容は主にバイタル測定や簡単な処置、服薬管理や健康観察などですが、七月より個別機能訓練を開始しています。機能訓練とは身体機能や生活機能の維持、向上を目的としており、個別機能訓練は利用者様お一人おひとりの身体状況や生活状況に合わせ、ケアマネジャーが作成したケアプランやデイサービス相談員が作成した通所介護計画書を元に計画書を立案し、計画的に機能訓練士が訓練を実施することです。

当初数名程度ではないかと思われた個別機能訓練でしたが、実際は約四〇名程の利用者様が利用を希望されていました。デイサービスでも体操やレクリエーションを取り入れています。個別にリハビリを受ける事を希

望される利用者様が意外に多い事は、皆いつまでも元気でいたい、現状維持をしたいという思いの表れなのではないかと感じました。誰でもいつまでも身体機能を維持しながら日常生活を送りたい気持ちは一緒であり、わずかではありますがお手伝いができる事を嬉しく思っています。また、機能訓練士としてのみではなく看護師としてお一人おひとりに寄り添いながら健康管理にも努めています。これからも利用者様がデイサービスでの一日を楽しく過ごせるよう職員共々取り組んでいきたいと思っています。



就労継続支援事業 望みの門新生舎

地域の中で輝く



職業支援係長 大貫 砂登子

新生舎第一作業部の一押し商品は「メロンパン」です。一言でメロンパンとは言え大変

奥が深く利用者様と作り上げていく上でなくてはならない商品です。

「メロンパン」はパンの生地の上に特製のクッキー生地をのせ発酵させて焼き上げていきます。その工程は材料の計量から始まり、クッキー生地を混ぜ合わせて寝かせた後、一定分量にクッキー生地を分割。(写真・クッキー生地分割作業の様子。)更に冷蔵庫で寝かせた後パン生地に乗せてふくら膨らんだところで焼き上げ完成。パンが冷めたら次は販売用に袋詰めを行い、原材料表示シールを貼り化粧シールを貼ってようやく店頭に並びます。第一作業部の利用者様はそれぞれの力が生かせる部分でこのメロンパンの作製に全員が携わり、支援員から利用者様そしてまた支援員、更にまた利用者様とそれぞれの思いをのせてリレーのように商品を作り上げていきます。そうして出来た「メロンパン」はそれぞれの力が生かされた渾身の一品として様々な販売先にて陳列され、お客様にご愛顧いただいております。

現在新生舎作業部は三部体制から二部体制へと再編成して活動していますが、労働意欲の向上を図り職業準備性を高め社会的な自立を目指す第一作業部と、よりきめ細やかな生活支援を主としながらも「働くこと」への意識を継続できるよう個別性の高い日中活動の提供を行う第二作業部への展開を進めています。

す。そして、利用者様が主体となって取り組むことができるよう作業の再構築・新たな展開を模索している中で前進と後退を繰り返しながらも、個々の能力や適性に合わせた日中活動の提供をしたいと試行錯誤しながら努めています。

「メロンパン」を完成させる上で一人一人がなくてはならない存在であると同時に店先で輝いているメロンパンのようにそれぞれの力が生かされ、「その人がその人らしく」地域の中の一人として価値ある存在となれるようサポートしたいと思っています。



千葉県中核地域生活支援センター 君津ふくしネット
繋がり続けるために



相談支援員 渡邊 眞紀

私は令和三年六月にのぞみ会に入職し、君津ふくしネットに配属となりました。

君津ふくしネットは「誰もが、ありのままに・その人らしく、地域で暮らす事が出来る」新たな地域福祉像の実現を目指して「子ども」「高齢者」「障害のある方」など支援を求めている方々に対し「対象者横断的な福祉の総合相談支援センター」として、二十四時間、三六五身体制で福祉に関するあらゆる相談を受け付けています。断らない、どんな相談も受け付けます。例えば①眠くなってきた、どうしよう?②持病が辛く病院に行くお金がない、もう死ぬから良いんだと言うお年寄り。③二〇年以上、ひきこもった生活をし、親が年を取り、これ以上の面倒が見れない。④⑤⑥どの相談も相談者自身に、今の状態をどう改善する事が良いのかを幾つか提案し、相談者が主体となり答えを選択できるよう、業務に努めています。中でも③の相談は、本人自身に困り感が無いことが多く、自分を守るための固い鎧を着こみ支援の声が届きません。そんな時は多くの機関と連携を図り、先輩に相談をし、助言を頂きながら本人主体となる

支援するには、こうしたら良いか、支援の着地点を定め繋がり続ける為の支援を目指しています。

相談支援員として、まだまだ未熟で勉強不足の私ですが、のぞみ会が築いてきた教えを根底に、尊敬できる先輩方から沢山の事を学びながら日々、成長できるよう努めて参りたいと思います。

富津市富津地区地域包括支援センター



管理者 溝口 麻理子

三年振りに地域包括支援センターに戻って参りました。変化が多く、慌ただしく三か月が経ちました。

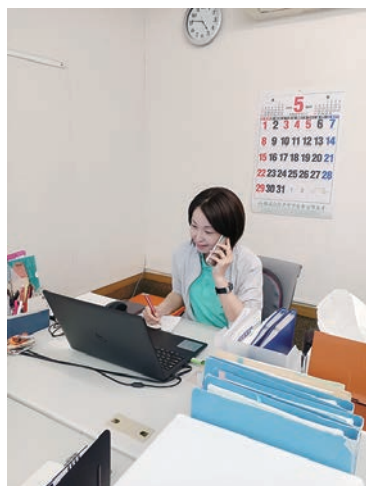
地域包括支援センターは、富津地区の高齢者をはじめとする地域の方々が、状況が変化してもいつまでも暮らしやすい地域でいられるよう様々な所へ働きかけていく役割をもって、日々励んでいます。

そのような中、法人が実施している認知症カフェ「門カフェ」が六月より再開となりました。センターで相談介入している認知症高齢者、家族にお越し頂きました。

法人スタッフ、地域のケアマネジャー、市の担当者、地域住民、当事者や家族が集まり、

お茶やお菓子を食べながら何気ないおしゃべりを交わしました。

最初は緊張の面持ちでしたが、話を聞いたり、自分の想いをお話された事で笑顔が出てきました。ご本人は「お菓子も美味しかったし、楽しかった。みんな優しくいい人だった。」ご家族は「自分だけで考えてしまってた。」どうして良いか真っ暗だった。実際この場に来てみてみんな明るく楽しそうにしている。本人も喜んでいる。デイサービスにも前向きになったみたいなので良かった。今日ここへ来てよかった。」と笑顔でお帰りになりました。このように人が繋がりお互いの力を借りて、悩んでいる人が先の光や活力を見出すことができた様子を見ると、地域包括が目指していく姿であると感じました。沢山の笑顔が引き出せるよう、様々な人の協力を得ながら頑張っていきたいと思います。



児童養護施設 望みの門かずさの里 食育を通して思うこと

児童指導員 渡邊 絹恵

みなさんは苦手な食べ物がありますか？ 苦手な食材でも調理法や味付けを変えることによって食べられるようになった経験もあるのではないのでしょうか。里で暮らしている子どもたちは、その育ちの事情からとりわけ食の経験が乏しい子どもが多いと感じています。食育担当職員として日々の育ちを綴っています。

入所時に「苦手なものはゴーヤだけ」と言う子どもがいました。たくさん食材を経験した結果から、苦手なものが一つであればそれはとてもすばらしいことです。が、実際の日々の食育から感じる通りやはり食の経験が少ない子どもでした。その後は見慣れない食べ物や並ぶ食卓の前に「これ何？」と聞き、渋々食べてみることも多かったようです。時には生姜焼きを前に箸が進まなく、見かねた年上のお兄さんが「ごはんと一緒に食べるんだよ！ このタレだけで一杯はいけるぞ」などあたたかい声をかけてもらったり、優しい職員から好きな物を分けてもらったりなど、たくさん経験を重ねました。それにより、逆に苦手な食べ物もだいぶ自覚し増えてしまいまし

たが、何より好きな食べ物がたくさん増え、食に対する興味も湧いて「また○○食べたいから出してね」とリクエストに来ることも多くなりました。

このようにたくさんさんの食材や料理を食べてきた経験が、健康的な食欲や嗜好の形成に繋がってきています。また色々な食材や料理を食べる際には、その新たな経験を後押ししてくれる食卓の雰囲気も大切です。苦手な食べ物でも「食べよう!」と幾度となく促されるよりも、「この料理すごく美味しいよ!一緒に食べてみようよ……」と実演を交えた優しい声掛けがあると、自然と一緒に食べてみよかなと思えてくるのです。

楽しく明るい食卓を囲む団欒の中でたくさんさんの食材や料理を食す経験をするのが、かずさの里で一番必要な食育であり、育ての大切な場面なのだと思います。

この楽しい談笑のある食卓の話題作りのために、取り組んでいることが手製の「日めくり献立表」です。食に関する豆知識やクイズ等のコメントを入れ、情報発信していますが、うれしいことに意外としっかり読んでくれる優しい子どもたちが多いです。他にも皆が楽しみにしてくれている、食のイベントもたくさん企画しています。昔ながらに臼と杵で大きな掛け声と共につき上げのお餅つきや流しそうめん、またカレーバイキングや唐揚げバ

イキング。広いグラウンドでの屋台のラーメン屋さんや納涼祭。パンやピザ作り体験等、とにかく食事を、食卓をみんなで賑やかに楽しみます。施設だからこそできる経験かもしれません。

一方で将来に繋がる家庭的な経験も大切にしています。自分の生まれた記念すべき誕生日を大切に幸せなものだと感じてもらいたく、開設間もない頃からずっと続けていることが手作りの誕生日ケーキです。切っ掛けは井本常務理事の「誕生日は一人に一つホールケーキだろう!」という言葉でした。自分のリクエストで好きなケーキを食べられるので、子どもたちもとても楽しみにしています。誕生日の何か月も前からリクエストを伝えにくる子、インターネットで調べた写真や設計図のようなデザイン画を描いてくれる子、救



急車・プリンセス・ドラえもんにかエルや羊・宇宙やお家など…ケーキのリクエスト?と思う物も多いですが、年に一度の大切な日、喜んでほしい一心で無理難題に頑張っただけです。皆と同じショートケーキで無く、自分だけの特別なケーキを前に、皆からのハッピーバースデーを聴き、恥ずかしがりながらもロウソクを笑顔で吹き消す姿はとても幸せそうに感じます。将来自分の子どもの誕生日をお祝いできるように、かずさの里でたくさんさんの経験をして、いずれ築く家庭が明るく楽しく家族団欒がある生活になってほしいと願っています。

乳児院 望みの門方舟乳児園 保育士を目指して



保育士 川名 久仁子

私が保育士になりたいと思ったきっかけは幼稚園の時に受けてくれた先生が、とてもやさしく自分にとって安らぐ存在だったからです。時にはやさしく時には厳しくいろいろな遊びや生活の決まり事を教わり、楽しかった思い出として心に残っています。

同じクラスに障がいを持つ男の子がいました。その頃は障がいという事に対して何の違

和感もなく、出来ない事は手伝い自然に世話をやっている自分がいました。いつも気になりそばにいたいと思います。子どもの頃から世話好きだったのかもしれませんが。

短大を卒業後保育所に就職し、自分の目指していた仕事に就く事が出来ました。その時は何に対しても全力投球です。しかし、結婚し子育てをする事でしばらくの間保育士の仕事から離れていましたが、子どもも大きくなり、家族のささえもあり、保育士にもどる事が出来ました。仕事と家庭の両立は大変でしたが充実していた様に思います。

今年の四月から方舟乳児園で働く事になり子ども達と一緒に生活しています。乳児園の仕事は覚えなければ出来ない事がたくさんあり日々勉強しながら子ども達と関わっています。

子どもの成長は早く昨日出来なかった事が今日には出きたりそんなうれしい瞬間を見る事が出来ますが、いろいろなハプニングもある中、試行錯誤しながら子ども達との関わり



方の難しさを実感しています。日々職員と情報を共有し、子ども達の健康状態を把握して一人

一人の関わり方を考えていかなければなりません。個性の違いや子ども達との相性などたくさん課題もありますが、一つ一つ向き合いながら解決できたらいいなと思います。そして今までの経験を活かし保育につなげていきたいです。



児童心理治療施設

望みの門木下記念学園

新時代の幕開け



臨床心理室長・心理相談員 小島 大輔

心理相談員として七年目を迎えました。が、当施設の心理療法は子どもへの配慮・思慮は元より、これまでは苦慮してきた年月であったと振り返ります。今年度は新たな心理チームとして臨床心理室が立ち、その責任者として重みを感じているところです。

昨年までは心理治療の一部分として個別の心理療法に力を注いで参りましたが、今年度はグループワークを加えた取り組みを進めています。今年第一回目のグループワークを五月から六月にかけて実施しましたので、それをご報告いたします。

今回のグループ活動で取り組んだことは行事作りです。県民の日を企画日に定め、「この日をどんな一日にしたいか考えたい人」と参加者を募りました。結果、参加者には児童の半数以上が集まり、このメンバーで五月から六月にかけて毎週話し合いを重ねました。そもそもみんな何をしたいのかを決め、考え・調べながら進めてきました。

このグループワークでは、「他の人から出た意見は否定しない」このルールだけは守るよう最初に伝え、その他は参加者の子どもたちに任せました。そして子どもたちからは、午前は外でサッカー・しっぽとり大会をして、午後は室内でカード大会・ゲーム大会・おかし作り、また昼食にわんこそば（うどん・ラーメン・そうめん）・夕食前には温泉にという企画が語られました。希望を叶えるため食材の買い出しや使っていないかった大浴場を急遽掃除し温泉として使用する苦勞もありましたが、子どもたちとこれらの準備を進めていき無事に「行事もりもりの日」が完成しました。当日の子どもたちはとても生き生きとし、笑い声の多い一日となりました。

今回初めて大浴場を使いましたが、人との距離感、浴室内マナー、ルールを扱う機会にもなり、貴重なソーシャルスキルトレーニングだったと思います。何より嬉しかったのは「また使いたい」と声上がり、子どもたち

自らが大浴場を掃除してくれています。

このグループワークを実践したことで、早速子どもたちに変化が起きています。一つ目は、グループで話し合うことが人との関わり方を学ぶ機会となり、苦手とする周りにいる人の事も考えて行動する、発言をすることを学習しました。二つ目は、子ども自身の内から出た声を形にしたこと。子どもの意見表明とそれを受け止める私たち。このような体験を通して木下記念学園の暮らしへの満足度が高まってきていると感じます。

子どもたちの大きな笑い声が聞こえたことで、私たち職員は集団を整えるため論し、気を配る存在ではなく、子どもの意思を形にするという立ち位置を改めて噛み締めました。今後子どもたちの声を聞ける存在でありたいと思うのと同時に、継続していく中で熟れていく施設の文化にするため、みんなで考え形作る取り組みを考えたいと思います。

暮らし全てを治療の場と



する「総合環境療法」の施設実践には質の高みが必要であり、悩みつつも前に進んでいる

望みの門創立六〇周年 記念式典の報告

「望みの門創立六〇周年記念式典」が五月二十一日(土) 富津公民館にて開催されました。式典には多くのご来賓の皆さま、望みの門関係者等々約二七〇名に参集いただきました。六〇周年の節目を共に祝いすることが出来ました。木下理事長は式辞で「六〇年前千葉県初の婦人保護施設としてスタートした時は、貧しい小さな施設だった。その後、この地に蒔かれた一粒の種は富津市や多くの人々のお陰で大きく成長した。不安定な時代であり、時代の求めに応じた対応も大切だが、キリストの教えは不変。今後も互いに協力し合い、補い合ってさらに成長させて頂く」と決意を述べ、感謝の挨拶をされました。また記念講演では、社会福祉法人鳥取こども学園理事長の藤野興一様より「私の人権宣言」望みの門創立六〇周年によせて」と題したお話を頂きました。これまで望みの門に関わり下さった全ての皆さまに心より感謝申し上げます。



60周年式典

今、そしてこれからも全児童・全職員とで木下記念学園の高みを目指したいと思っています。

望みの門京葉後援会講演会と総会の報告

七月二日(土) 日本キリスト教団西千葉教会を会場に「望みの門京葉後援会講演会と総会」が九十九名の参加者で開催されました。望みの門京葉後援会は一九六七年にのぞみ会京葉後援会として望みの門を支援して下さるキリスト教会の団体として活動を始められました。望みの門でのボランティア活動、献金、そして会員の皆さまのお祈りによっていつも望みの門を支えて下さっています。この日は「教会と社会福祉―望みの門の成り立ちとその働き―」と題しまして木下宣世理事長より講演があり「社会福祉の使命は社会の一員として生きていくときに、さまざまな困難に直面して助けを必要としている人を支援することであり、その行いは教会の証しとしてされるものである。」という力強いお言葉を頂きました。木下理事長の講演の様子は西千葉教会のホームページから視聴することができます(八月三十一日まで)。

<http://park17.wakwak.com/~nishichiba/top/top.html>



ミャンマーからの実習生

五月二十日よりミャンマーからの実習生五名を受け入れました。海外からの実習生受け入れは望みの門にとって初めてのことになります。法人にて一ヶ月間の日本語や日本文化の研修を経て、現在特別養護老人ホーム望みの門紫苑荘と望みの門富士見の里に分かれて現場実習に取り組みられています。皆さんが早く新しい生活に慣れ、良い働きをされますように。



編集後記

安倍晋三元首相が街頭演説中に銃撃され死亡した事件は群衆の面前で起き、その映像は瞬く間に世界中に広がった。襲撃した男は「母親が宗教団体にのめり込み恨みがあつた」と供述している。

長いコロナ禍にあり閉塞感が漂う日本で、個人的な憎悪を一方的に募らせ爆発させたのである。ダイバーシティ(多様性)とインクルージョン(包摂)が注目され、個々の良さを受け入れ、生かすことが新しい価値を生み出すと分かっている。私たちは分厚い自我の壁から自由になることは難しいのである。多様性を受け入れるためには、相手に伝えたいことを言葉にする、コミュニケーションをとり、相手を理解しようとすることの積み重ねが大切になる。こちらから相手の立場について学ぼうとすることも必要であり、人種や国籍に限らず、世代や性別の違い、個々の考え方の違いなど、さまざまな状況で言えることである。時間はかかるかもしれないが、まずコミュニケーションや学びを通して、互いに違いを認め合うことが多様性を受け入れるということに繋がっていくのである。

めんどくさい?多様性は「みんなが快適な世界」ではなく「みんなが少しずつ不快な世界」のことで自分が嫌いなもの、自分の価値観と合わないもの、それに嫌悪感を持ちながらも存在を容認していく姿勢である。自分の「萎え」は誰かの「萌え」なのであるから。

(T2)